

TZ 〈ほんの窓〉

第 63 号 (2022.12.1) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏助成図書コーナー「本の紹介」班

鷗外森林太郎と高木兼寛 ～脚気と闘った軍医たち～

(※【 】内は、附属図書館の請求記号です。)

2022 年は森鷗外生誕 160 年・没後 100 年の記念の年にあたります。文久 2 年 1 月 19 日 (グレゴリオ暦換算 1862 年 2 月 17 日) に生まれ大正 11(1922)年 7 月 9 日に没した森林太郎は、文豪鷗外は副業で、本業は陸軍軍医、しかも政府高官エリート官僚でした。ドイツに留学し細菌学・衛生学を学んだ彼の生涯を通じて最大の課題／トラウマは、陸軍兵食論とそれに直結する脚気対策でした。

(坂内正『鷗外最大の悲劇』東京：新潮社, 2001 (新潮選書) 【9100:3394】 版元品切れ)



「科学の歴史の研究というのは、「人間はどんな間違いをするものか」その間違いの仕方から学ぶために研究するものである。過去の人間が犯した誤りをあとから笑うのではなく、「どうしたら同じような誤りを犯さなくて済むようになるか」ということを知るために研究するのである。その点、脚気の歴史は豊富な資料を提供してくれるのである。」

(板倉聖宣『模倣の時代』上. 東京：仮説社, 1988, p.379 【4900:454:上】)

高木兼寛 (たかき・かねひろ) は嘉永 2 年 9 月 15 日 (グレゴリオ暦換算 1849 年 10 月 30 日) に生まれ大正 9(1920)年 4 月 13 日に没しました。麦飯を海軍に導入し、イギリス医学流の経験論に基づいて脚気の予防に実績をあげていました。

(松田誠『高木兼寛伝：脚気をなくした男』東京：講談社, 1990 【2800:3075】)



原因は不明だが経験則で見出した有用な予防法を陸軍でも寺内正毅、土岐頼徳、山地元治ら麦飯派は実施しましたが、石黒忠恵、森林太郎らは「麦飯がなぜ脚気に効くのか、ということが完全に解明できなければ麦飯の給与を認めることはできない」とドイツ医学を権威とする論理で白米食に固執し続けました。日清戦争・台湾征討・日露戦争などでは戦闘による死者を上回る数の兵士が無駄に戦病死しました。

(山下政三『鷗外 森林太郎と脚気紛争』東京：日本評論社, 2008 【9100:2156】)

脚気は筋肉及びそれを支配している神経の活動に必要なビタミン B₁ (チアミン) を主とするビタミン B 群の欠乏による多発性神経炎ですが、当時はビタミンというものがまだ発見されていませんでした。江戸時代に精米技術が進歩し、胚芽部分に含まれる栄養成分をむぎむぎ削り捨てていることに気付かないまま、貧弱な副食だけで白米ばかりをたくさん食べる食生活により脚気は「江戸患い」とも呼ばれる、原因も治療方法も不明のおそろべき死病として猛威をふるいました。米を主食としない西洋には脚気という病気自体が存在を知られていなかったもので、西洋医学は脚気に対して無力でした。現代の予防医療のあり方を考えるうえでも、歴史に学んで過去の過ち・愚行を教訓として謙虚に認識し、現在および未来に活かす反省材料とすることには大いに意義があります。



渋沢栄一の命を二度も救った高木兼寛

「渋沢が高木兼寛と特に親しくなったのは1894年(明治27年)、兼寛が渋沢の癌を手術してからである。渋沢はこの1894年と1904年の二回、生死にかかわる大病をしたが、そのつど兼寛によって救われ、以来その報恩もあって、兼寛の事業を献身的に手伝った。1907年、慈恵医院を改組して社団法人・東京慈恵会をつくった際には、実業家団体の募金委員長を引受け、またその中心人物として活躍した。」(松田誠著『高木兼寛の医学：東京慈恵会医科大学の源流』東京：東京慈恵会医科大学，2007，p.661【2800:1695】)。

「明治27年11月18日(1894年)是ヨリ先、栄一顔面上皮癌ヲ患フ。是日医師橋本綱常・スクリッパ立会ノ下ニ、高木兼寛刀ヲ執リテ切開手術ヲ施ス。」(『渋沢栄一伝記資料』第29巻 p.108-109【Qb:282:29】)

「大正10年4月23日(1921年)是日、神田一橋高等小学校ニ於テ、当会主催故当会会長高木兼寛追悼講演会開催セラル。栄一出席シテ追悼演説ヲナス。」

「為に私の第一の大病は全く故博士の為に十分な治療を受けたと申上げて宜しいやうでございますが、次の病ひは丁度それから十年経つた日露戦役の時でございます。」「故男爵の御治療に依つて幸に全快したのですが」「御懸念なされるも無理はないけれども併し私は必ず全快すると思ふ、吃度全快させ申すから」(『渋沢栄一伝記資料』第46巻 p.151-156【Qb:282:46】)

鷗外の文芸作品を読む

文芸作品には鷗外の思想、人格形成に関わる伝記的事実が数多く反映されており、軍医としての活動／ものの見方考え方を理解するうえでも大いに参考になります。

短編小説「妄想」ではエドゥアルト・フォン・ハルトマン『無意識の哲学』、フィリップ・マインレンデル『救済の哲学』などを紹介しています。「かのように」では「アルス・オップとはなんだい」と問われてハンス・ファイヒンゲル『かのようにの哲学』*Die Philosophie des Als Ob* を解説。

「坊主が酒を般若湯(はんにゃとう)というということは世間に流布しているが、鶏を鑽籬菜(さんりさい)というということは本を読まないものは知らない。」これは小倉での生活を素材に書いた短編小説「鶏」の一節です。「キタ・セクスアリス」では、主人公の金井湛が江戸時代後期の有職故実書『貞丈雑記』を読むことについて、寮で同室になった古賀鶴介から「何が書いてある」と訊かれて「この辺には装束の事が書いてある」「そんな物を読んで何にする」「何にもするのではない」と問答しています。普通の人がつまらないと思うような本でも楽しんで読めるキャパシティ、興味関心の幅広さはそれ自体が超人的な才能です。鷗外の読書は古今東西に及びますが、書籍にとどまらず、ドイツの新聞や雑誌も購読し、大量に翻訳紹介しました。翻訳短編小説集『諸国物語』所収の奇譚はバラエティに富みます。

そんな博聞彊記の鷗外の書く作品なので、読者の教養レベルを見誤ってか、難しい言葉を無頓着に書くことも多くて読みにくい。「鷗外は文中不必要にフランス語...を使う。なぜ日本語でいわないのか。」(高橋義孝『森鷗外』東京：新潮社，1985，p.269【210:644】)。注解語釈の充実した版で読まないときさっぱりわかりません。「秀麿もの」と通称される連作短編のひとつ「藤棚」で「人は天使でも獣でもない。Le malheur veut que qui veut faire l'ange fait la bêteである。」(パスカル『パンセ』の断章678)とフランス語で引用しているのはまだしも、史伝『渋江抽斎』にすらフランス語を必然性もない箇所がたくさん散りばめて意味不明な個所をむやみに増やしています。自分の読者ならば国際語たるフランス語をこの程度は知っていてあたりまえ、ということなのでしょう。

「舞姫」は高校の現代国語の教科書に載っていたので冒頭の一文「石炭をば早や積み果てつ。」を覚えている人も多いでしょう。寒いベルリンで太田豊太郎がストーブに石炭をくべたのかと思いきや、さにあらず。日本への帰国途上の最後の寄港地サイゴン(現ホーチミン市)で蒸気船に燃料として石炭が積み込まれたのでした。

嫁姑が確執する問題作「半日」、妻しげが書いた小説「波瀾」、森於菟『父親としての森鷗外』、森茉莉『父の帽子』、森類『鷗外の子供たち』をはじめ家族親族の著書や研究者の解説などと照合しながら「本家分家」「あそび」「食堂」「蛇」「金毘羅」「カズイスチカ」などを読む。フィクションなので伝記的事実からわざと改変しているところも随所にありますが、小説を単品でそのまま読むのと、実生活上の背景を知ったうえで読むのとでは、寿司を食べるときの醤油やワサビの有無ほどにも味わいが違ってきます。